

## 発達検査・心理検査からみた言語発達遅滞児の発達Ⅱ

－1：6児健診で発語に遅れを示し知的な遅滞を指摘された幼児の3年間の追跡を通して－

本 保 恭 子

(ノートルダム清心女子大学)

(目 的) 幼児の発達は個人差が大きく、伸びの時期に偏りがみられることもしばしばある。本研究では、1歳6か月健康診査で言語遅滞を中心とした発達の遅れを指摘されたが、2歳から1か月の間に急激な伸びを示し正常発達に達し、しかしながらも恣意的行動や興味の限局性を残す幼児の発達について、約3年間の発達検査・心理検査結果から検討したので報告する。

(対象：A児) 1996年生まれの男児。満期産。正常分娩。両親は、A児について他児よりは若干喜怒哀楽の感情を示すことが少なくおとなしい、にもかかわらず我は非常に強いと感じていた。しかし、発達については気にすることがなかった。ところが1歳6か月健康診査において言語発達遅滞を中心とした知的発達の遅れを指摘され、2週間に1回専門機関の言語訓練および小児科外来の発達相談に通うようになった。専門機関では軽度の自閉傾向が疑われるとの診断を受けていたが、転導性が減少し、数字へのこだわりが消失したために訓練は3歳でうち切れ、3歳6か月より地域の保育園に通園している。保育園では特に問題を指摘されていない。

(実施検査) 遠城寺式乳幼児分析的発達検査  
新版K発達 WPPSI知能診断検査

(結果及び考察)

### 1. 遠城寺式乳幼児分析的発達検査結果(図1、表1)

A児の遠城寺式乳幼児分析的発達検査結果プロフィールを図1に発達指数(DQ)を表1に示した。

遠城寺式乳幼児分析的発達検査では、1歳7か月時点で移動運動を除き発達指数は他の領域すべてDQ61～68と健診において軽度の発達遅滞を指摘されても仕

方のない状況であった。発語はマンマのみ、ことばかけに対し表情を変えることがほとんどなく静かで、気に入ったことしかしようとしなかった。したがって、言語領域は発語も理解も11か月前後の発達段階であった。しかし、5か月後の2歳時には6～8か月の急激な発達を示し、DQも87となった。発語は、ワンワン、ブーブー、もも、クック、ハサミ、ケーキ、目の名詞と痛いの形容詞がみられ始め、1から10まで数字を数えるようになった。しかし人と手をつなぎたがらなかったり、絵本を読んでもらいたがらないなど1歳6か月の課題でありながら通過しない項目があり、また父母を呼ぶことばが出ないなど対人面の領域で特徴がみられた。ところが、1か月後にはカー(母)、「行った」の動詞が出現し急速に

| C A<br>(生活年齢) | 領 域  |      |       |      |     |      | 全領域 |
|---------------|------|------|-------|------|-----|------|-----|
|               | 移動運動 | 手の運動 | 基本的習慣 | 対人関係 | 発 語 | 言語理解 |     |
| 1 : 7         | 89   | 68   | 68    | 68   | 61  | 61   | 69  |
| 2 : 0         | 94   | 94   | 94    | 94   | 71  | 75   | 87  |
| 2 : 1         | 106  | 106  | 106   | 106  | 100 | 94   | 103 |
| 2 : 4         | 102  | 102  | 102   | 102  | 91  | 91   | 98  |
| 3 : 0         | 117  | 106  | 96    | 96   | 106 | 106  | 105 |
| 4 : 3         | 90   | 98   | 106   | 90   | 98  | 98   | 97  |

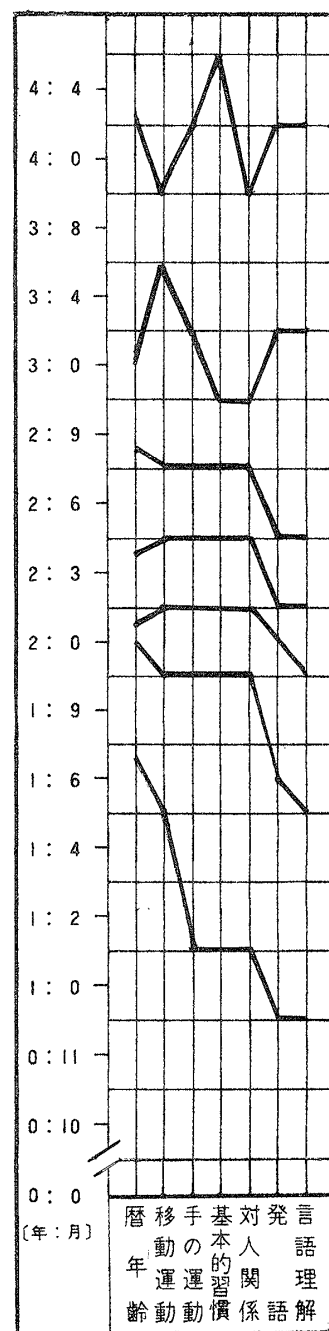


図1 遠城寺式乳幼児分析的発達検査プロフィール

単語の数が増加した。この1か月の間におむつがとれ、絵本を読んでもらいたがるようになった。さらに他の子どもの集団に自発的に入っていこうとする姿勢が見られるようになり、同年齢の子どもと手をつなげるようになった。発語領域のDQは100に達し、全領域のDQも103となった。以後発達指数は100前後で安定している。発語面では、2歳2か月の時2語文が出現、2歳11か月頃より3語文が出現し会話に困らなくなった。1歳と2歳、3歳以降の発達の様相が異なってきていることが図1のプロフィールからわかる。1歳の時点では発達全般の遅れがみられたが、2歳になると言語面の遅れのみが残り、3歳以降は言語発達は追いついたものの対人面の遅れが顕現してきており、A児が持つ問題の本質が明確になってきていた。

## 2. 新版K発達検査結果(表2)

1歳7か月時点、遠城寺式検査結果においてA児の発達指数はDQ69と境界線級であったが、新版K式発達検査結果ではDQ83と総合的には健常な発達に達していた。しかし、言語・社会領域をみるとDQ61にとどまっており、城寺式検査結果と同様、言語・社会・対人面での遅れが懸念されていた。通常では1歳頃からみられる「指さし」行動がなく、他者と外界の事物やその名称を共有することがなかった。しかし、2歳になると言語・社会領域に急激な伸びがみられ2歳の課題である「絵の名称」を通過し、2歳4か月のDQは99に、3歳のDQは97に上昇していた。姿勢・運動、認知・適応の領域についてもDQ100前後であった。課題の内容をみると、「形の弁別」や「視覚による記憶課題」には高い集中力を示し、「大小・長短比較」など認知能力をみる課題は難なく通過した。一方で、「模写」や「折り紙」はできにくく、形と空間関係の理解と手と指の調整がやや困難であることがうかがわれた。最も困難であったのは、「復唱」で聴覚からの単純記憶能力の弱さが明らかに現れていた。

## 3. WPPSI 知能診断検査結果

A児の生活年齢が4歳3か月時に実施されたWPPSI 知能診断検査では、5種類の言語性検査のうち2種類、5種類の動作性検査のうち3種類のみ実施が可能であった。興味の転導性はみられなかったものの、関心を示した検査は動作性検査のうち「動物の家」「迷路」「幾何図形」の3種類で、「絵画完成」と「積木模様」については「絶対しない」と意志表示し、全く取り組もうとしなかった。言語性検査については、5種類すべての検査において指示を聞くことをおっくうがり、かろうじて「知識」と「単語」の2種類の検査を実施することが

できた。自分が興味を持った「動物の家」「迷路」「幾何図形」の検査については、最初から最後まで行程を一人で処理できるため、集中し迅速に対応することができ評価点もそれぞれ13点、14点、12点(平均10点)と高かった。その動作性の能力に比し、言語性能力は「知識」8点、「単語」7点と低い値を示していた。1歳6か月時に指摘されたことばの遅れは、4歳3か月時点においても言語面の弱さとして尾を引いていた。概ね日常生活面での問題はないというものの、各課題ごとに細かいやりとりをしながら返答したり模倣したりしなければならない検査について困難さがみられ、最も気に入った「動物の家」の検査について何度も繰り返し行いたがり、注意しても用具を離さず他の検査に取り組もうとしなかった。このことより、コミュニケーション能力の低さや自己中心性、状況に応じた活動レベルの制御の困難さが問題点として指摘された。

表2 新版K発達検査結果

| C A<br>(生活年齢) | D Q |       |       |       |
|---------------|-----|-------|-------|-------|
|               | 領域  | 姿勢・運動 | 認知・適応 | 言語・社会 |
| 1 : 7         |     | 108   | 82    | 61    |
| 2 : 0         |     | 96    | 98    | 97    |
| 2 : 4         |     | 99    | 117   | 99    |
| 3 : 0         |     | 95    | 95    | 97    |

(まとめ) A児は、1歳6か月健康診査において言語発達遅滞を中心とした知的発達の遅れを指摘され、両親は非常に神経質になり療育専門機関や小児科を頻繁に訪れた。ところがA児は、2歳になると1か月の間に健常レベルに達し、家族に喜びと混乱をもたらした。このことから1歳6か月から2歳までの発達遅滞の断定は慎重に行われなければならないことが示唆された。2歳以降A児は、発達検査結果においては平均的な発達の様相を示している。しかし、4歳になった現在も、自閉症や注意欠陥／多動性障害の診断を受けているわけではないが、他者の働きかけすべてに対し関心を示すわけではなく反応は弱い。その反面自己主張が強く場の状況に頑固に適応しないという行動がみられ、1歳6か月時点から社会性という側面で心配されていた性格行動特徴は、むしろいっそう顕在化してきている。遊びの要素を持った発達検査の実施が可能であっても、知的能力のみを診断する検査において実施が困難であったことから、社会性に加え集団での学習への適応という点で養育環境および教育への配慮が今後の課題といえよう。